

「正信偈」について（第八回）

正信偈の教え上 古田和弘、正信偈のこころ限りなきいのちの詩 戸次公正、等による

せつしゅしんこうじょうしやうご

せつしゅ

しんこう

しやうご

攝取心光常照護

攝取の心光、常に照護したまう。

いのう すいは むみやうあん

むみやう

あん

は

已能雖破無明闇

すでによく無明の闇を破すと

いえども、

とんないしんぞうし うんむ

とんない・しんぞう

うんむ

貧愛瞋憎之雲霧

貪愛・瞋憎の雲霧

じようふしんじしんじんてん

しんじつしんじん

おお

常覆真實信心天

常に真實信心の天に覆えり。

〔意訳〕

すべてをおさめ取られる慈悲の光は、常に照らして護^{まも}つて下さる。すでに無明の闇は破られてはいるけれども、欲望と怒り憎む心が雲や霧となって、常に真實信心を上から覆っている。

せつしゅ

おき

「攝取」というのは、阿弥陀仏が私たちを摂め取ってくださいること、すなわち、救い取ろうとして下さっていることです。「心光」は阿弥陀仏の大慈悲心の光です。

「光」は多くの場合、仏の「智慧」のはたらきの事を言います。私どもは、自分の思いにこだわり続けていますから、本当のことがわからず、ものの道理についてまったく「無知（無明）」なのです。しかも、道理がわかっていないのに、わかっていると思い込んでいるのです。つまり、わかっていない事自体が、実はわかっているのです。

その様な心は真つ暗闇のようだと教えられています。暗闇を暗闇でなくするもの、それが「光」です。「光」のはたらきを受けて、同じ暗闇そのものが、そのまま暗闇でなくなるのです。私どもの心を照らし出

し、その心の暗闇を破ってくださるのが仏の「智慧の光」なのです。

その様な「智慧」にもとづいた「慈悲」の心のことを、「摂取の心光」と詠われているのです。

その「摂取の心光」すなわち、私たちは、すべてを摂め取おきろうと救い取ろうとされる阿弥陀仏の大慈悲心の光に、「常照護」(常に照護したまう)常に私たちの身と心を包んで照らし、私たちを護ろうと現にしてくださいっているというわけです。

この光に照らされているという事実によって「已能雖破無明闇」すでによ(已能く無明の闇を破すと雖も)とあるように、私ども心の「無明」の闇はすでに破られている、いや、破られているはずなのです。

「貪愛」は「貪欲」とんあいともいわれますが、しがみつく愛着・欲望です。それは無知によって起こる心の動きです。無知ですから、しがみつけば必ず苦という結果をもたらすのに、それを知らずに、自分にとってこの上なく大切なものと錯覚して、愛着をいだくのです。

「瞋憎」は「瞋恚」しんぞうともいわれます。怒り憎む心です。怒りや憎しみは、自分の思い通りにならない時に起こります。時には思い通りになるはずのないことをも、思い通りにしようとこだわります。これも無知によって起こります。怒りや憎しみは、他の人びとを傷つけると同時に、自分自身をも傷つけることになります。そして心の平静さを失わせ、ますます間違った方向に自分を追いやってしまうのです。

折角阿弥陀仏の大慈悲心の光に照らされて、無知が除かれ、「眞実信心」が受けとめられるようにしてもらっているはずなのに、どこからともなくわき起こってくる「貪愛」や「瞋憎」の雲霧で、その阿弥陀仏から振り向けられた、他力の「眞実信心」を常に覆い隠して、それ自分から遠ざけている、又は、それに気づかない自分になっているのです。わざわざ自分で自分をいっそう深刻な無知にしているのです。けれども、阿弥陀の大慈悲心の光は、その様なことでは覆い尽くせるものではないと、聖人はこの次の句に詠われるのです